

世界のお話

2

こども図書館

花岡大学



にんじん山のできごと



童話

民話

神話



世界のお話2 こども図書館

にんじん山のとき

昭和四十三年十二月二五日印刷
昭和四十四年一月一日発行

定価 四五〇円

著者—花岡大学

発行者—横山実

印刷者—上田庄之助

発行所—大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三の一七
大阪市東住吉区田辺西之町六の四

郵便番号東京—一〇一 大阪—五四六

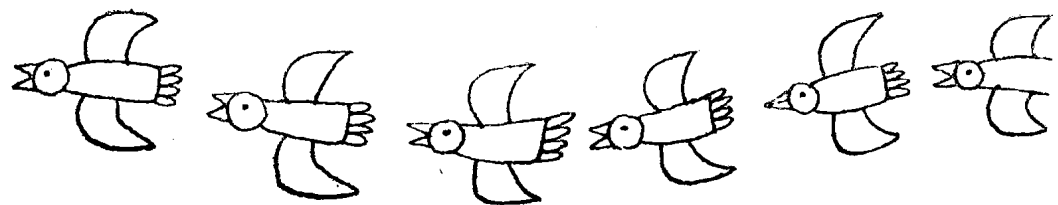
©1969・花岡大学・上田印刷・堀越製本
落丁本・乱丁本はお取り替えます

さるのてぶくろ

花岡大学



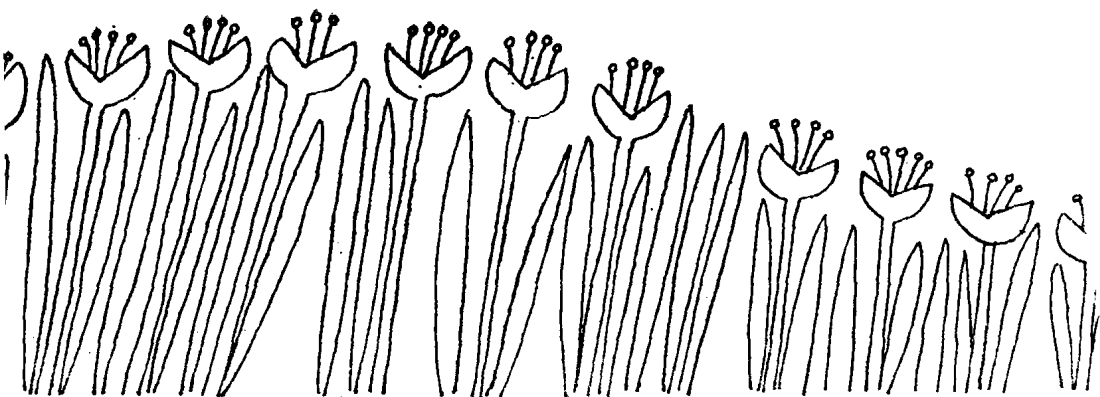
大阪教育図書



は じ め に

この本は、名高い世界の童話、民話、神話のなかから、もっともすぐれたお話を、いくつかづつえらびだしてつくったものです。

そのいずれもが、きっと、みなさん方の心をとらえてはなさないでしょう。こどものころに、そういう経験をもつということが、人間を形づくる上に、とても大切なことなのです。読んだあと、おかあさんといっしょに、いろいろと話しあってください。



はじめに



童話



しっぽ同盟

.....九

うさぎの知恵

.....一九

空へふっとんだ仕立屋さん

.....二七

働く王さま

.....三六

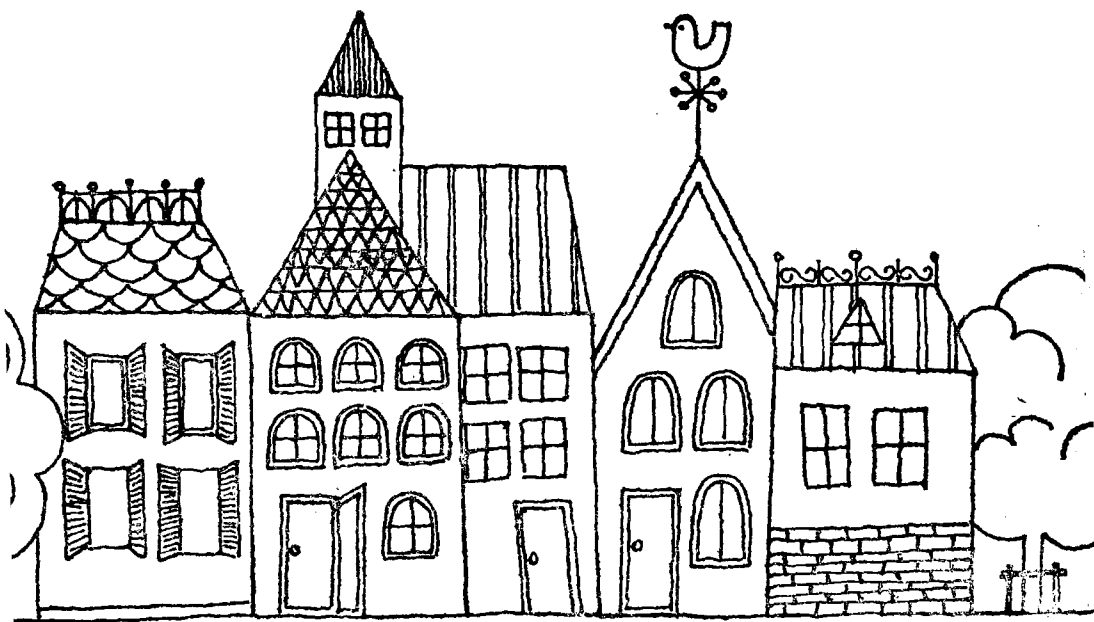
＊ 民話 ＊

しかととらの家

.....四七

にんじん山のできごと

.....五九



たまごのひみつ 七

魔法使のいたずら 九

◇ 神 話 ◇

タカマガ原 九

いたずらうさぎ 一〇

くもになったむすめ 一〇

とりもどした鉄のつち 二四

* *

お話の解説 二三



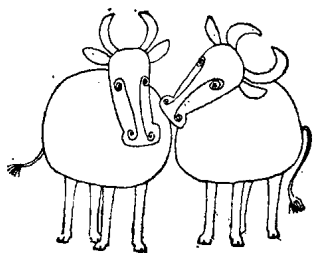


■ 装幀

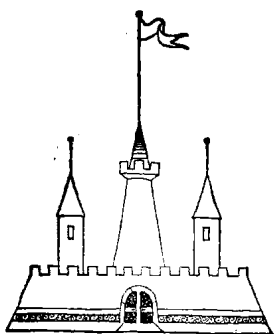
尼 谷 義 雄

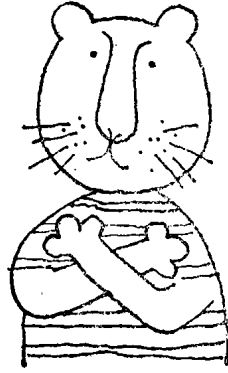
■ さしえ

大 古 尅 己
大 竹 昌 夫



童話





し
っ
ぽ
同
盟

ひとり
一人のお百姓さんが、牛をつかつて畑をすいていました。

そこへ、とつぜん一匹の虎がかけてきて、

「お百姓さん、今日は、いいお天気ですね。」

と、こえをかけました。

お百姓さんは、息がとまるほどおどろいて、がたがたふるえながら、やっと、

「こ、こんにちは、ほ、ほんとにいいお天気ですね。」

と、こたえました。

「じつはね、お百姓さん！」

と、虎は、つづけて、いいました。

し
っ
ぽ
同
盟

「今日、わたしがここへきたのは、神さまのおいいつけなんですよ。神さまが、この牛を食べてこい！ と、おっしゃったわけでさ……あなたは、なかなか信心ぶかいお方だそうですが、どうですか、神さまのおぼしめしにかなうように、さっさと牛をすきからといって、わたしにわたしてくれませんかね。」

虎は牛が食べたくなってやってきたんだということがわかった、お百姓さんはほっと胸をおろしました。

するとすこし勇気がわいてきて、こういいました。

「へえ！ こりやおかしい。神さまはわたくしに、この畑をたがやすようにとおいいつけになりました。畑をたがやすのには牛が必要だろうとおっしゃって、この牛をわざわざおつかわしになったのです。だからこれはきつとあなたが、どつかの牛とおまちがいになっているのにちがいありませんよ。ほかのところへいっておたずねになつてはどうですか？」

「いや、まちがっちゃいないんだ！」

と、虎はすこりくつにつまって、こわい顔をしながら、いいました。

「まちがったっていいじゃないか。とにかくわたしは、腹がぺこぺこなんだからな。はやくわ

たしてもらいたい。」

「でも……。」

「でももなにもない。わたししてくれなきゃ、かつてにもらうまでだ。」

「わかりました、虎さん！」

ど、お百姓さんは、なんとかしてこの場をきりぬけようと考えたすえ、こういいました。

「でも、この牛がいなくなると、畑がたがやせなくなりますので、ほかのものでごしんぼうねがえませんか。うちには、この牛なんかとくらべものにならないほど、てっぷりふとった、乳牛がいます。これからかえってすぐそいつをつれてきますから、それまで、おまちくださいませんか。」

「へえ！ 乳牛……あいつは、やわらかくついていい。よし！ そんなら、しばらくまっていいことにする。」

「ありがとうございます。」

そういつてお百姓さんは、牛をつれてかえろうとしました。虎は、

「おや、その牛も、つれてかえるのかい？」

「へえ！ ごはんを食^たべさせねばなりませんので……。」

「おれに、うそをついたら、どんな目^めにあうかしてるな。」

「ええ、わたくしが、うそをついたりするのですか！」

「よし！ そんなら、できるだけ早^{はや}くいつてこい。」

お百姓^{ひやくしやう}さんは、うちへかえって、おかみさんにのこらずこの話^{はなし}をし、なんかうまい方法^{ほうほう}はな
いものかと相談^{そうだん}いたしました。

なかなか勝負^{かちき}でりこうなおかみさんは、

「わたしの大事^{だいじ}な乳牛^{ちゆうし}なんか、やれるもんですか……。」

といって、しばらく考^{かんが}えていたあとで、こういしました。

「じゃすぐあなたはてぶらで虎^{とら}のところへひきかえしていつて、乳牛^{ちゆうし}はどうしてもわたくし
についてこようとしませんので、すぐあとから妻^{つま}がひっぱってまいりますからつていつてくだ
さい。」

「そんなことをいつて、お前^{まえ}、どうする気^きだい。うそをついたりすると、ひどい目^めにあわさ
れるぞ！」

「あとは、わたしが、うまくやります。」

お百姓さんは、こわごわ手ぶらで虎のところへひきかえして、手ぶらのわけをいいました。よつぽどおなががすいているらしく、虎は齒をきらきら光らせ、爪をがりがりたて、おそろしい顔をしながら、仕方なしに、おかみさんがつれてくるという乳牛をまちかまえていました。しばらくすると遠くの方から、ラッパのようによくひびく大きなこえがきこえてきました。馬にのっている、みたこともないほど大きな人間が、こういつているのです。

「さてさて、このへんでひとつ、虎をみつけたいもんだな、おとといから、虎の肉を食べそこなっているのてな。あの日は運がよくって、朝飯に三匹の虎をぺろっとたいらげてしまったつけ！」

その声をきいた虎は、もともとたいそうおくびょうものだったものですから、顔色をかえて、「ふえっ！ たいへんなやつが、やってきたぞ。」と、いいました。

お百姓さんには、そのばかにてっかく見える人間は、妻がへんそうしているのだということがすぐわかりましたので、いかにもおそろしそうに、

「あ、あいつは名高い虎食い男だ！　まるであくまみたいなやつです。虎さん、あいつにはだれだつて勝つものはありません。おにげなさい。早く早く！　悪いことはないません。あ、どうやら、こつちへやってきますよ。」

「そうかい。そりやかなわん！」

虎は、あわててにげだしました。

お百姓さんは、うしろから、

「来ましたよ、来ましたよ。はやく、はやく……。」

と、さげばましたので、虎はあとおもわずに、まっしぐらに森の中へかけこみました。

あまりあわてていたので、森の中からでてこようとしていた山犬と、あぶなくぶつつかりそうになりました。

「どうしたんです。虎さん！　そんなにいそいで、どこへいくんですか？」

「にげる、にげる！　あくまみたいなやつがやってきたんだ。朝飯に虎を三匹もぺろつと食

べたんだつて！　はやくにげなきやお前もやられるぞ。」

「なんにも、きやしませんよ。」

と、山犬やまいぬは、おちついていいました。

「馬うまにのつた人間にんげんが、くるだけですよ。」

「ばかだな。あくまあくまつてのは、あいつだ。あいつがものすごいやつなんだ。」

「うふふ……。」

と、山犬やまいぬは、笑いながらいいました。

「何なにがこわいもんですか。あれは、百姓ひゃくしやうのおかみさんですよ。」

「ほんととか？」

「ほんとか、うそか、よくみなさい。豚ぶたのしっぽしっぽみたいな髪かみの毛けが、背せ中なかにぶらぶらしてい

ますよ。」

「いや、やっぱり、あいつ、あくまにちがいない？」

と、おくびおくびような虎とらは、山犬やまいぬをにらんでいいました。

「お前まえは、あの百姓ひゃくしやうにまるめこまれて、おれをだまそうと思おもってるんだな。」

「そんなばかなことを……いや、そんなにいうなら、わたしもいっしょにいきますからそばへいってたしかめましょう。」